日本鳥学会

鳥学ニュース No.49

1993年11月1日

個体群生態学のすすめ

江口和洋

鳥の研究を行なっているが、自分をいわゆる「鳥屋」や「鳥学者」と思ったことはなく、むしろ「生態学者」、なかでも「個体群生態学者」に近いものと思っている。鳥学会大会のプログラムをみると、会員の研究の主流は生態学であることがわかる。しかし、生態学の中でも個体群や群集を取り扱う、昔流でいえば「群生態学」分野の研究は少ない。ひるがえって、海外に目を向けたらどうであろうか。「個体群生態学は既に死に絶えた」(個体群生態学会報48号)と言う見方もあるが、個体群生態学や群集生態学は鳥類生態学の重要な分野であり、なかには鳥類での研究が他の生物での研究をリードしている分野もある(群集生態学など)。個体群生態学の理論や手法は他の分野の研究を進める上の基礎となるものである。したがって、日本でこの分野の研究者層がうすいということが、鳥学会全体のレベルアップの妨げとなっていると思う。

日本では、なぜ鳥類の個体群の研究が少ないのか。生態学は成果がでるまでに長い年月がかかり、個体群研究はその最たるものである。これが主要な理由の一つである。データの収集に長期の研究が必要で、かつ繁殖期には多数の番いについて集中的な調査を行なう必要がある。しかも、データの収集に労が多い割に結果の情報量は多くない。その課題によっては、一年間のデータがグラフの中の一点にすぎない場合もある。「継続は力なり」とはいえ、短期間に成果を上げたいと思うものは、もっとデータが多量にとれる行動の研究などを選ぶだろう。また、研究機関にポスト

マダガスカル・ムラマンガの"グランド・ホテル"にて

を持つ研究者が少ないことも、大量のデータを収集する長期の研究を困難にしているし、環境の改変が激しく長期に安定して調査できるフイールドが少ないことなど、長期の研究の遂行を阻むものは多い。その上、個体群研究では多様な制御不可能な要因が関与するために、取れるデータがあいまいな傾向しか示さないことが多い。このことは研究意欲をそぐ原因にもなる。また、個体群研究に限らないが、会員が世界の趨勢を知る手段が限られていることも理由の一つであろう。鳥学会のような特定の分類群を対象とした学会は多くのアマチュアを会員に持つという特徴がある。そのため、ほとんどプロの研究者で占められる他の学会に比べて、先端の学問レベルを知る機会（専門雑誌や図書のある図書館の利用、国際学会への参加、適当な日本語の解説書など）が少ない。これは大きな障害であると思う。

では、鳥類研究においても、個体群生態学は死に絶えてもしかたないものだろうか。否。日本の鳥類生態学研究に必要なものがこれである。科学においては理論化から検証のコースを経て諸現象の解明がなされる。そのために最も能率的なのは、遺伝学におけるキイロショウジョウバエ、分子生物学での大腸菌のような扱いやすい材料を選ぶことである。しかし、生態学の目的を平たく言えば「自然界の謎の究明」であり、いろんな生物で研究を進めない限りは謎は謎として残り、研究の余地は常に埋められないままになる。鳥類をはじめとした脊椎動物ほど個々の種での生態の解明の必要が存在する。つまり、生態学の進む方向としては一般法則の発見と個々の生物での実態の把握の両方向が常に存在し、そのどちらかが尊いというものでもない。保護や管理の問題が起こった時には後者の方向が必要で、このような事態は鳥類や大型哺乳類でしばしば生じる。ある鳥類やその生息環境を保護する必要に迫られた時、たいていの場合はその種については生態や生息数などがわかっていない。近縁の分類群でも十分な研究がなされていなければ、まったくのお手上げになる。つまり、大量のデータの収集や目覚ましい発見が期待できない動物についても、個体群動態のモニタリングは必要であり、ここでは個体群生態学的な研究が要請される。

では、どうすればいいのか。私は「まず手近から攻めよ」と言いたい。鳥学会の発表を見ても、「……の繁殖生態」とか「……の生息環境」とかいうタイトルの講演は多い。先に述べたことと一見矛盾するようであるが、個体群のデータは得やすいのである。しかし、発表の多くは結果の報告の域を出ていない。これをさらに一歩進めるためには、系統だった多量のデータを長期にわたって収集しなければならない。この、「多量」と「長期」が難しいのである。しかし、せめて2年連続でデータをとるだけでも大きな一歩になる。ただし、適切な実験計画に従わないと長期間とったデータもゴミになることがある。

良い研究を行なうには、適切な実験計画とデータ解析、それに関連理論の修得が必須である。そのために、プロの研究者、指導的な研究を進めている研究者の果たさねばならない役割は大きい。先に述べたようなノンプロ研究者の被る不自由のいくつかは、プロの研究者の協力によって解決できよう。個人としてできることはいろいろあると思うが、学会としてできることを一つ提案したい。それは、学会誌に総説の欄を設けて、常時、依頼原稿などで埋めることである。編集委員で鳥類学全分野を網羅するよう課題のプログラムを作り、その一つ一つについて適当な人に原稿を依頼するのがよい。いろんな立場の会員を含み、研究レベルのバラツキが大きい鳥学会では、通常の学会のような競争原理よりも相互扶助によってレベルの向上をはかるのが得策だと思う。一流の研究者は個人の資質の問題であるからほっといてもいずれは何人かは出現するだろう。今、鳥学会に必要なものは、つとに指摘されているように、学会全体の底上げであろう。私は「群生態学」の発展こそが日本の鳥類生態学のレベルアップにつながると考える。

（九州大学理学部生物学教室）

国際行動学会（スペイン）に参加して

松田　喬

CONFERENCEで

第23回の国際行動学会（IEC）は、南スペインの保養地トレモリノス市で9月1日～9日に開かれた。私は中村浩志さんの誘いを受けて、IECに引き続いてグラナダ大学で行なわれたBrood parasitismに関するサテライト・ミーティングへの出席を主な目的に参加することにした。また、上田恵介さんにけしかけられて、オーラルセッションでも発表した。国内でも鳥学会しか参加したことがなく、初めての国際学会参加であり、しかも英語が苦手な私にとっては、冷や汗ものであったが、それなりに得るところが多かった。日本からの参加者は京大の旧日高研を中心に20数名で、鳥関係では上田恵介さん、大庭照代さん、中村浩志さん、高須夫悟さんに私という顔ぶれで、後の3人は大会後のサテライト・ミーティングにも参加した。

発表はプログラムではプレナリー25題、オーラル172題、ポスター385題と8つのシンポジウムとなっていたが、欠席も多く、特にポスターには空きが目立った。内容と対象が多岐にわたっている上に、プログラムと講演要旨集がうまく連携していないので、内容を確認するのに苦労した。

Brood parasitism. Sibling competition. Parental care などのセッションを中心に聞いたが、DNA fingerprint やmt-DNAの分析を使った成果が目立った。

オーラルセッション

自分自身の発表について言えば、まずイントロにと用意していったビデオが当日になって使えないことが分かり、スライドでしのいだ（同じVHSでも、ヨーロッパと日本では方式が違って使えない）。OHPをむこうの指示どおり15×15cm以内の大きさにしたら小さく、A4のままが良かった。さらに、寄る年並で暗いところで原稿を読むのにたいへん苦労した、と失敗ばかりだったが、席を立つ人もなく、質問にも何とか答えることができた。終わって席に戻るときにChair manのPayneさんが「とてもおもしろい内容だった」といってくれたのでホッとした。どんなに英語に自信がなくても、やっぱり発表するほうがいいと思う。

サテライト・ミーティング

Brood Parasitismに関するこのミーティングは、91年に日本でIECが開かれたときに軽井沢で行なわれ、それが大変好評だったことから再び企画された。今回は、托卵鳥ばかりでなくアリの育児寄生の話もあり、幅が広がった反面、焦点がぼけてしまった感じがした。また、前回の軽井沢で議論を盛り上げていたザハビ、ディービス、ロススタイン、樋口広芳さんなどの顔が見えなかったのも寂しかった。しかし、20数名と少人数であり、ミーティングの合間に催された夜のアルハンブラ宮殿見学や4台のジープに分乗してのシェラ・ネバダ山脈の3000m峰への日帰り旅行など盛りだくさんの企画があり、全員が顔なじみになり大変なごやかな会となった。そして、今後もぜひ継続しようと言うことになり、次回は3年後にオーストラリアで開こうということになった。帰国後、IEC貯金を始めた。次の大会はハワイだ！みなさんふるって参加しましょう。

（大宮中央高校）

生物音響学入門講座へのお誘い

春の連休に音声コミュニケーションについての入門講座を開催します。ふるって御参加下さい。定員がありますので2週間前までに往復葉書にて住所・氏名・職業・年令・電話番号を明記の上、申しこんで下さい。部分参加も可能です。高校生以上の方を対象とします。

3／19（土）　なぜ生き物は鳴くのか。

3／20（日）　生き物の音声の録音と保存。

3／21（月）　生き物の音声の構造を調べる。

申込み先：〒280 千葉市青葉町955－2　千葉県立中央博物館　生態学研究科　大庭照代

覆面座談会
「松山大会を振り返って」

大会が終わった11日の夜、松山市内の某飲み屋において、ニュース編集委員会の主催で、今回の大会を振り返って"言いたい放題"という座談会がもたれました。出席者名は公表できませんが、ニュース編集委員会より2名、一般会員から3名の計5名。性比は♂3：♀2、年齢は30歳以上だったということだけ、明らかにしておきます。

K：では、さっそく大会の感想を述べていただきましょうか。

N：よかった、の一言。

O：ア　、それ私が言おうとしていたのに。

E：懇親会が特によかった。ジャコ天がうまかった！

N：タコ飯と鯛麺もよかったで。

進行方法

K：もうちょっとまじめな話を……

N：進行が遅れて、次の講演に食い込んでいくことがあったけど、座長が3鈴　15分が鳴ってから質問を受けたりするからやと思う。

K：それでも昔よりましや。

N：休憩でカバーできるかもしらんけど、発表者は時間守って欲しい。12分で終わらせたらええやんか。質問もできるし。

K：それなら3回鳴らすのを、10分、11分、12分にしたら？

O：関連した講演を集めて、一つずつの講演には質問時間を取らずに、最後にまとめて質問という形にしたらどう？

E：演者がいなくなってる可能性もあるよ。自分の聞きたい講演がその時間帯にあったりして。

O：それはあんまりだわ。

M：質問者もいなくなってるかも。

N：質問が出ないときはどうする？

O：それは座長の裁量にまかせたら？

E：ぼくは15分の休憩はぜいたくだと思うな。生態学会なんかはキュウキュウでしょ。

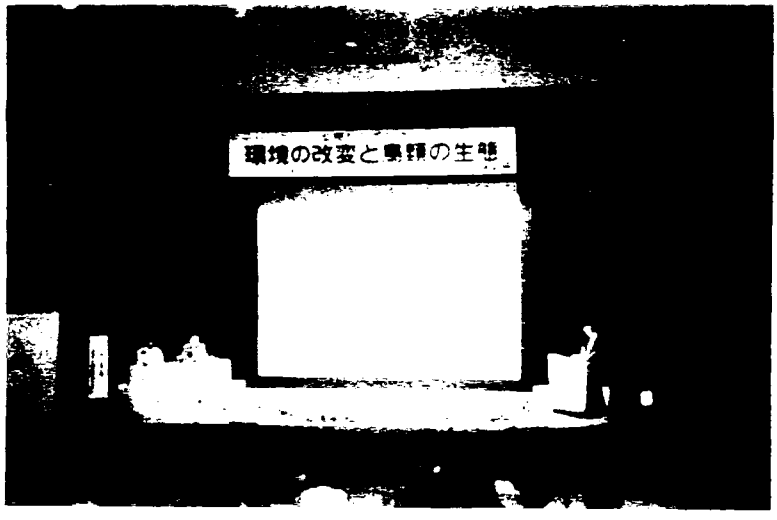
日　程

N：今度はほぼ丸3日で、同時に3会場ある日もあったけど、あれはどうかな。

M：3日でも聞けない。足りないくらい。

K：だんだん多くなってきたから、そのうちD会場くらいまで出来るんとちゃう？

N：3日にすると主催者がしんどいんとちゃう？たいてい2日で、土日やったみたいやけど、あれは理由があるんかな？



K：仕事を持ってるアマチュアの人なんかは土日しか休めないからでしょ。

N：ワシなんか、土曜の午前休むのでも苦労するで。

O：思い切って休まなきゃダメよ。

N：今回は夏休み使ってつこったけど、次のテーマはいかに3日休むかやね。

E：ポスターを増やすという手もあるよ。口頭発表を制限することになるけど。

K：誰が審査するわけ？「ワシが何でポスターやねん」なんて言う人が出たら困るで。

発表形式

O：関連づけた一般講演を持ってくれば、さらに論議も盛り上がるのにねえ。

N：これだけ本数があれば、並べるのも大変とちゃうかな。

K：ＩＯＣ（国際鳥類学会議）なんかは、関連講演を集めて、シンポジアという形式で運営してるで。

O：自由集会みたいなものがもっと確立してきたらいいと思う。時間も限られているから、選抜してまとめていくのもひとつの方向だと思う。

N：いやホンマ、それはええ思うで。カッコウならカッコウでまとめるとか。

E：個生研のようなのは？　関連テーマを決めるという……

O："コセイケン"て何？　湖に関係したこと？

K：個体群生態学会のシンポのことやんか。今年は支笏湖やったから、湖に関係してないこともないけど……（笑）

N：長めの話を聞く会がよかった。あんな風に、一人1時間くらいにして、途中質問もＯＫにしたら。

O：学会大会でテーマを決めて講演募集をしたことは？

N：シンポのテーマて、どんな風に決めるんかな？

K：実行委員会でしょ。

M：今回、愛媛大の人たちの発表が最後の方になってたけど、あれはどう思います？

E：身内を後ろに並べるのが普通と思うけど。

M：謙虚ねえ。

K：立川先生の人柄が出てるんとちゃう？

ポスター発表

N：ポスター会場が狭かった。

O：人がいっぱいで行きたいところへも行けなかった。

E：僕も全体的に狭かったと思う。遊びが必要とちゃうかな。

O：狭い部屋なので、声がワンワン響いてつらかった。90cmはポスターの幅でいっぱいになってしまう。

M：時間はどう？

O：広ければあれでよかったけれど……

E：両側でやってると説明するのもやりにくい。

O：それと、発表者の立場としてはずっと立っていなければならないのがつらい。ユトレヒト（前回の国際行動学会議）方式はどう？一人5分の"宣伝トーク"がもうけられていて、3分しゃべって、2分質問。それで5分たてば途中でも切っちゃう。もっと聞きたい人は、あとからポスターのところへ行くという形式。

K：来年のＩＯＣでもポスター＆トークいうのがあるよ。

（ポスター会場の狭さについては、立川先生から、会員の皆さんにお詫びしておいてほしいとの伝言がありました）

要旨集について

N：要旨にグラフもいっしょに載せるというのはどうかな。

E：要旨を送る時点でまとまってたらいいけどね。

O：本当はデータ出てるのを発表すべきじゃない？学会によっては厳しいところもあるわよ。

E：予稿集が業績になるところもあるしね。

O：どんな風に書いていいのかわからない人もいるから、アブストラクトの書き方の例を５例くらい出したら？

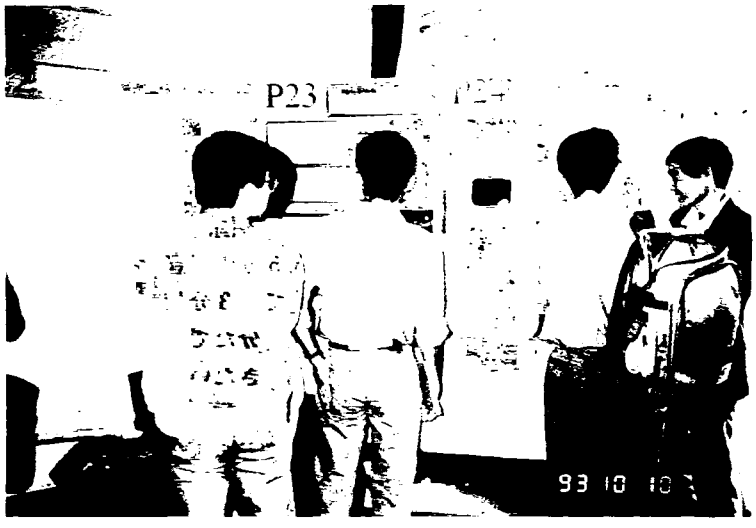
E：画一化していいところと悪いところがあると思う。例文とまったく同じになったらどうする？

K：日本人の悪いとこやね。

N：１ページあるのはいいけど、字が多いと読むのが面倒くさい。短い方が見やすい。Mさんの自筆のとか、U君のが意外と読みやすかった。

O：あまり制限をしないで、目安を示せばいいと思う。良い例を集めたら？

コアジサシの自由集会



K：僕は出てないけど、あれはすごかったね。Kさんはよくやったね。

N：一つのテーマをとことんやるというのは、いいと思う。あんなのは今回はじめてとちゃうかな。大変やったろうけど。

M：ああいうのをすると研究者のネットワークが出来ていいんじゃない？

特別講演

M：メラーさんには悪いけど、彼が来れなかったおかげで、立川先生の話が聞けたもの。

O：面白かったよねえ。勉強になったわ。メラーの話の内容は知ってるから、こっちの方がよかったとか、会場で言ってた人もいたわよ。

K：それはワシや（笑）。

M：あれは向こうのエージェンシイが日付を間違ったのよ。メラーさんは自分が間違ったかと、思っていたそうよ。

E：先に出てしまってたから、中で何が起こってるか知らんかった（笑）。

M：アナウンスが悪いんよねえ。

N：結果的にはメラーも聞けたし、立川先生の話も聞けた。ラッキー！昼休みも有効利用できたし。弁当持ち込みもええんとちゃうかな。

O：でも、食事しながらじゃねえ……。

N：昼の１時間、遊ばせる必要ないと思う。

E：けど一般講演は一応オフィシャルなものやから……。

N：自由集会したらいいんとちゃうかな。

O：ちょっとハードじゃない？

K：日本人向きやねえ。それより弁当たべながらのラウンドテーブルをしてみたら？

E：きちんとしたタイ

ムテーブルがあるときばれない。

O：昼ご飯食べながら話してる時間は大切だと思う。今日はキツかったわ。昼がああいう使われ方をしてしまったから。余裕が必要よねえ。

E：学生にとってはオフタイムにエライ先生と話しができるのがいいと思う。

K：ポスター会場でワインとビールをだすと言うのはどうかな。それで夜の10時くらいまでやったら？ウィスコンシンのＩＥＣがそうやったけど、中で飲めるとこがあったほうがいい。

E：去年はピライさんが来て、今年はメラー、来年は？

K：外国の研究者の参加はすごく刺激になると思う。そやけど国際シンポは４年に１回で、大会に重なるとは限らない。

O：女性研究者を呼びたい。貯食の神経生理してるニッキィ・クレイトンとか。

K：マリオン・ペトリーは？

O：パット・モニハン！

K：知らん！（笑）

O：じゃ、ケチェルニクは？

K：あいつ性格悪いて、イギリスに行っとったＨさんが言うてたで。

E：九大に来たことあるよ。

M：今回、いろんな分野の人が来てくれたのが、よかった。デビッド……とか。

K：デビッド・アンドウ？個生研で嶋田と芸やってた奴でしょ。

O：今まで、鳥の生態中心すぎた気がする。もっと他の分野にも目を向けることが大切じゃない？

参加者

M：ところで何人くらい来てた？

K：名札に276というのがあったけど、あれ人数かな？

M：若い人が多かったわねえ。

K：そう。メチャクチャ若い。あれは何？

（ワシラは中年じゃ！）

E：北大が増えたからとちゃうかな。北大とつくばは増えたけど、九大は減ってる。

M：愛媛大も多かったでしょ。こんなところに大会が地方を回ることの意味があるんじゃない？

O：四国の他の県は？

E：あんまり関連講座がないから……

K：学会に入ってないけど参加する学生が多いんとちゃうかな。学生会員は20何名かやで。

上越大会への注文

M：エキスカーションはぜひやって欲しいな。

K：温泉は？（笑）

O：地域を知るいい機会がエキスカーション。地元の人がガイドしてくれるのがいいと思う。

お　願　い

現在、私はモズとアカモズの種間関係の研究のため、モズとアカモズの死体もしくは、ハクセイを必要としています。もし、これらをお持ちの方は下記までご連絡お願いします。

〒060 北海道札幌市北区北10条西５丁目
北海道大学大学院環境科学研究科
高　木　昌　興
TEL. 011 (716) 2 1 1 1　内（2264）
FAX. 011 (746) 5 1 3 6
（E-mail ad.）Masaoki Takagi %env%
hines @xmail-gw. sys. hokudai. ac. Jp

第1回国際モズ類シンポジウムに参加して

高木昌興

去る1月11日から15日まで、フロリダのアーチボルド生物学研究所において第一回国際モズ類シンポジウムが開かれた。開催地がフロリダということもあり、北米地区の参加者が半数以上を占めていたが、アフリカ、ヨーロッパ、アジア、ロシアなどモズ類の分布している主要地域、25ヵ国から92名が参加した。日本からは大阪市立大学の山岸哲さん、北海道の小川巌さんの両ベテランモズ研究者とビギナーモズ研究者の私の3人が参加し、昨年までポスドクで山梨大学に在籍されていたCarola A. Haasさんも参加された。

一般講演はすべてモズ類に関連したもので49本あり、テーマごとにまとめると（以下カッコ内は本数）進化・分類・生物地理(4)、繁殖生態(7)、社会生態(5)、一般生態(8)、個体群の現状と傾向(19)、飼育下での繁殖(4)、研究技術(2)となる。テーマごとに発表本数を比べると現状と傾向という項目の本数が群を抜いていた。この研究は主にモズ類の経年的な個体数変動の調査から、その個体数の減少傾向に着目し、モズ類の生息場所がどのような状況にあるのか、またモズ類の生息場所を取り巻く社会的な情勢がどのようになっているのかという観点からの発表であった。また、飼育下の繁殖に関する講演には、個体群の維持が危機的な状況になったサンクレメンツ島に固有なアメリカオオモズの1亜種の個体数回復プロジェクトに関する報告が含まれていた。世界のモズ類研究者の多くはモズ類を対象にして保全生物学的な研究に興味を示す傾向があるようだ。研究技術の講演はT. C. Grubb, Jr. 氏によるもので、尾羽の伸長に伴って羽の上面に羽軸に対して直角に現われる暗色線によって鳥の栄養状態を査定する技術の紹介であった。この講演は全員参加の実習付きであった。

私は小川さんと共著でモズとアカモズの種間なわばりと両種の利用資源の重複に関する講演を行なった（実のところ口頭発表は国内外を通じてはじめての経験だったので一体どうなってしまうかと心配していたのだが開き直ってやった）。発表後にはアメリカオオモズとアメリカチョウゲンボウの種間関係を研究している方々と意見交換ができ、台湾とロシアでアカモズの研究をしている方々からはいくつかの質問を受けた。

また、一般講演の他に数ヵ国の大学教授によって特別講演が行なわれた。山岸さんは"マダガスカルのオオハシモズ類"の講演をなされ、その中のオオハシモズ類の嘴の形状とニッパーなどの工具を対応させた写真はそのアイデアの面白さから会場内を一気に沸き上がらせた。G. E. Woolfenden 氏は20年間におよぶフロリダヤブカケスの個体群動態をフロリダに特徴的な野火による植生の更新と結びつけて講演された。

会期の後半に用意されたResearch and conservation prioritiesと題されたディスカッションでは、本当にモズ類は世界的に減少しているのかという点について多くの研究者が意見を述べ合った。最終日にはこれを受けて、International Shrike Working Groupが発足し、世界の様々なモズ類に共通な方法で個体数と生息場所の状況を把握できるようなモニタリングシステムを作ろうということで第一回国際モズ類シンポジウムは閉幕した。

P. S. このシンポジウムは会期を通してアットホームな雰囲気が持続されリラックスして過ごすことができた。そして、話を聴きたい、したい人と十分に時間を過ごすことができた。小さな会合の大きな利点であろう。帰国してしばらくすると、世界各国の研究者から色々別刷りや手紙が送られて来る。無理をして参加した甲斐があった。

（北大・大学院・環境科学）

コスタリカ通信

(3 異国での第一歩

直木一弥

2月にコスタリカに来た時、東京で買った"A Guide to the Birds of Costa Rica"が私の唯一の資料だった。住居が落ちついた翌日から、Nikon の7×35と、このガイドを手に大学の周辺や近くのフィールドを歩きまわったが、このガイドの絵はお世辞にもうまいとは言えず、識別ポイントを示す矢印はなく、ただひたすら似たような絵がずらりとページに並んでいる。加えて分布図がない。先号でも述べたように留鳥が多いが各種の分布は広くない。特に近縁種は分布がほとんど重らない、また鳴き声を違えている場合が多い。だからそこら辺をうまく使えば、それだけでかなり種類がしぼりこめるのだが、土地勘が全くなく分布がよくわからない。また"clear whistled scratchy dweer"などと書かれてもどんな声なのか見当もつかない。最初の1ヶ月、30mの林冠部を移動するぼう大なアメリカムシクイの群れと一瞬で目の前を通り過ぎるハチドリの輝きに惑わされ、さらに意志の十分に通じないスペイン語の壁に自信喪失し不安と焦りで、ぼう然と過ごした。その後、1種1種と確認し、数種の文献から鳥相区とその変化の要因となる降水量と高度、さらにハチドリなどは自分で分布図を作り、2ヶ月後100種を確認したあたりから、なんとなく輪郭がつかめるようになり、またスペイン語も、生き残るには困らない程度には上達した。その中で、初めて一つの国の鳥相を気候、地形、地史、植生との関係から体系的に観る機会に恵まれたことは本当に大きかったと思う。

日本にいた時、ただなんとなく自分の住んでいる土地での季節と共に変化する鳥相を見ていただけで、その鳥相が日本の、旧北区の世界の鳥相の中でどういった位置をしめ、特徴を持っているのか考えたことがなかった。今、日本から遠く離れて少し私の土地の鳥相が見える気がする。

(コスタリカ大学在学中)

関連学術集会

1993年

◆12月1～3日　第16回極地生態学シンポジウム(極地研：no. 48)
◆12月3～5日　動物行動学会大会(静岡大：本号)

1994年

◆1月22～23日　津戸基金シンポジウム(立教大：本号)
◆1月22～23日　第4回オオタカ保護シンポジウム(栃木県小山市)
◆1月28日　公開講演会「鳥の眼からみた水辺の環境―日本とヨーロッパの比較」(大阪：本号)
◆3月28～30日　日本生態学会大会(九州大：本号)
◆8月14～20日　第5回国際行動生態学会議(ノッティンガム：no. 48)
◆8月20～25日　第21回国際鳥学会議(ウィーン：no. 48)
◆8月20～26日　第6回国際生態学会議(マンチェスター：no. 48)

関連分野の学会大会・シンポに関する情報をお知らせ下さい(〆切：2カ月前)

学術集会情報

公開講演会「鳥の眼からみた水辺の環境―日本とヨーロッパの比較」

1994年1月28日(金)に上記の講演会（主催：淀川におけるオオヨシキリ調査グループ）が開かれます。プログラムは以下の通りです。参加は自由、無料。来聴歓迎。

日時：1994年1月28日(金)　14：00～16：30

場所：大阪市立大学文化交流センター大ホール

（大阪駅前第3ビル16階、ＪＲ大阪駅から徒歩5分）

プログラム：

1．山岸　哲（大阪市立大学教授）日本の水辺環境と鳥類群集。

2．Andrzej Dyrcz（ポーランドWroclaw大学教授）

Present situation and conservation of the riverside and other waterside environments／ecosystems. as well as of their avifauna in western and central Europe(中西部ヨーロッパにおける河畔・水辺環境とそこに生息する鳥類の現状と保全)。（通訳あり）

★Dyrcz教授は、ヨーロッパのヨシキリ類についての長年にわたるすぐれた生態研究で有名な方であり、近年は湿地の保全の分野でも活躍されています。

問い合わせ：〒669-13　兵庫県三田市弥生が丘6丁目

姫路工大・自然環境科学研／人と自然博

江崎保男　TEL 0795 (59) 2021　FAX 0795 (59) 2015

津戸基金シンポジウム

小笠原における最近の鳥類研究

今年度の津戸基金シンポジウムを下記の要領で行ないます。小笠原は興味深い鳥学のフィールドでありながら、交通の不便さなどもあって、長期にわたる野外調査などは行なわれてきませんでした。しかし、近年、小笠原をフィールドに何人かの研究者が鳥学研究に取り組んでいます。今回のシンポジウムは、小笠原で最近、どんな研究が行なわれているかを紹介し、併せて日本で唯一の大洋島小笠原諸島の鳥類の現状と保護の問題点を考える場となれば、と思って企画しました。

呼掛け人：上田恵介

日　程：12月18日(土)～19日(日)

場　所：立教大学　5号館5223教室

1日目（土：午後）Part Ⅰ：メグロの生態と地位、及び他種との関係

森岡弘之　小笠原の鳥類の起源とメグロの分類学的位置

樋口広芳　メグロの行動圏と繁殖生態

上田恵介・唐木雅徳・佐藤英樹・メグロのセンサスと個体数推定

濱尾章二　本土のウグイスとハシナガウグイスの社会構造の違い

コメント：

1．メジロ、メグロ、ウグイスの営巣場所選択と一腹卵数（長野康之）

2．メグロとメジロの採食空間の違い（池田昌枝）

2日目（日）Part Ⅱ：小笠原の鳥の現状と保護における問題点

千葉勇人　小笠原で繁殖する海鳥

上田恵介・長野康之・唐木雅徳　小笠原におけるメジロの盗蜜行動

千葉勇人・船津毅　オガサワラノスリの現状

鈴木惟司　オガサワラカワラヒワの現状

千葉勇人　小笠原に定着したモズ

日本動物行動学会大会

12月3～5日に日本動物行動学会第12回大会が静岡大学（教養部・教育学部）で開催されます。講演申し込みは終了していますが、当日参加は可能です（学会員以外も可）。参加費は3500円。3日がシンポジウムとラウンドテーブル。4・5日がポスター発表と一般講演で、プレゼンテーションの仕方についてコンテストがあるそうです。

問い合わせは、〒422 静岡市大谷836 静岡大学・教育学部・生物学教室内、
第12回日本動物行動学会大会事務局（TEL：054-237-1111、内4561　河田雅圭）

日本生態学会第41回大会

1994年3月28～31日に日本生態学会第41回大会が九州大学（文系キャンパス講義室）で開催されます。講演は学会員に限られますが、一般参加は可能です。申し込みは12月16日〆切。参加費は5500円（当日は6000円）、懇親会費は5000円です。問い合わせは、

〒812 福岡市東区箱崎6-10-1　九州大学・理学部・生物学教室内
日本生態学会第41回大会準備委員会
（TEL：092-641-1101　内線4418、FAX：092-632-2741）

成末編集委員の

若手研究者インタビュー（10）

福井晶子さん

1991年秋に、立教大学で鳥学会が開催されシンポジウム「鳥と木の実の共進化」を興味深く聞かれた会員も多いと思われる。その時のパネラーの一人が、当時筑波大学・斉藤隆史先生の研究室に在籍していた福井晶子さんである。

福井さんの研究テーマは、植物と動物が相互に生かし合い、支え合っている関係をときほぐすことにある。1993年春には、北海道大学のドクターコースに進学されたが、その前に立教大学の月例勉強会で、これまでの研究内容についてお話して頂いた。その内容を簡単にご紹介したい。

植物は、移動能力が乏しいので動物の手（口？）を借りて、より遠くに分布を広げようとしている。一方動物は、植物（果実）を食べて生き、その種子を排泄することによって種子を散布している。このような植物と動植の相互作用を、野外と実験室でヒヨドリを使って調べてきた。

ヒヨドリが食べた種子のほとんどは、30分から60分で排出された。種子が小さいほど、また量が多いほどすべて排出しきるまでに時間がかかった。つまり、排出されるまでの約1時間が、ヒヨドリが種子を散布する範囲であり、小さい種子ほど遠くに運ばれる可能性がある。これは、直線距離にしておよそ300mの散布距離であったという。さらに興味のある方は、是非福井さんの近著「ヒヨドリによる種子散布」（平凡社発行の地球共生系シリーズ第5巻：動物と植物の利用しあう関係13章）をご覧頂きたい。

鳥の種子散布といえども意外に狭い範囲であることに驚かされる。都市林の林床に多いアオキなども、ヒヨドリの仕業である。鳥類が、森林形成にどのように関わっているのか大変興味深い問題である。動物を知るためには、植物というバックグラウンドを知ることが必要になり、植物は動物というフィルターを通すことによって種子の大きさや色が、意味あるものとして浮き彫りにされる。このような植物と動物の境界領域の研究が、専門領域の1つとして、発展していくことを期待したい。

会員の皆様へお知らせ

学会事務局が11月１日より移転しました。

新事務局住所

〒558
大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部動物社会学研究室気付
日本鳥学会事務局
TEL：06-605-2607　FAX：06-605-2522

会費の振込口座は従来通りの口座番号で変わりません。

《御寄付への感謝》

高橋敏夫、宮城正吉両氏からそれぞれ 5,000円の寄付をいただきました。有難うございます。鳥学基金に加えました。（旧会計幹事）

ちょっと長めの編集後記

●10人の若手研究者の方々と、ご愛読下さった皆様に心から感謝して居ります（成）。

●たった３回しか編集のお手伝いができなかったのは少し残念です。これからはどんどん投稿して、新しい編集の方々を困らせてみようと思います（Go）。

●ちょうど10号分のニュースの編集を手伝ってきたわけだが、私自身は発行を間に合わせることや体裁を整えることで精一杯だった。今になってみると、もっと遊び心を持って編集にあたればよかったと思う（花）。

●川内さんから編集幹事をひきついで３年。若い人たちにとって魅力ある学会、活発な議論ができる学会になるように、誌面をつくってきたつもりです。どこまでできたかわかりませんが、今年の松山大会での若い人たち（私は中年です）の活躍を見ると、やってきてよかったなと思います。長い間、ご声援ありがとうございました（K）。

尚、事務局が大阪市大へ移るにともない、ニュースの編集は来年からは兵庫の江崎保男さんに引き継がれます。

原稿送り先は、

〒669-13　兵庫県三田市弥生が丘６丁目
姫路工大・自然環境科学研／人と自然博
江崎保男
（☎0795-59-2021、ＦＡＸ. 59-2015）

編集委員一同（左から藤田・成末・花輪・上田・大堀）

鳥学ニュース　No.49
１９９３年11月１日　発行　（会員配布）
発　行　日　本　鳥　学　会
〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部動物社会学研究室気付
TEL. 06-605-2607　FAX. 06-605-2522
発行人　山岸　哲　　印刷所　添田印刷株式会社
編　集　花輪伸一・大堀　聡・成末雅恵・藤田　剛・上田恵介